



雲

男



作 池田真哉

目の前の現実が、まるでウソであるかのように思える。ウソというか、なにか軽々しいもので、ふーと吹けば、消えてしまう。はたまた、夢の中の映像かなにか。いつかは、この世の中のものも消えてなくなる。そして、この自分さえも、何処かへいく。コンクリートでできた固い橋脚も100年もしないうちに朽ちるだろう。なにもかもが朽ちてゆく。自分もまた、永遠の一点に位置しているにすぎないのに、その一点が永遠に続くものという誤った感覚を持ったまま、その真実をふいに感じ取ってしまったがため、違和感を感じているにすぎないのであろう。なんなんだ。この感覚。

単に最近、考えごとばかりしていて、外界からくる刺激をうまく、感知していないのかもしれない。思考の洞窟に入り込んでいては、外の陽の光をうまくとらえることはできない。なんだ、僕は幸せだということだ。それだけ、没頭できるものがあるという証拠じゃないか。

雲男は、考えごとばかりしている。その視線は、未来へと向いている。未来を創ることを考えていると、おのずと自分は、ここにはいないようになってくる。未来のことばかり考えて、理想を追い求め、それに近づくように、今を生きていく。すでに自分は、未来の枠組みの中において、そこから今を見ているんだ。そうか、そういうことか。だから、この現実がウソのように思えてくるんだ。わかったよ。雲男は、実のところ、未来人であった。

未来人の思考法は、すでにこの世のものではない。つまり、この世に生きていないわけで、もう、自分自身もどこにいるのやら、あやふやになっている。不明瞭なわけだ。自分がこの世にいるのやら、いないのやら。いや、自分さえも忘れていく。忘我の境地に達しているようだもの。禅的な観点からすれば、結構、いい線いっているのではないであろうか。自然と一体化して、自己は無限大になって、もう、そこには、澄み渡る湖や空、一直列に並んで飛ぶ鳥の群れや朝露にぬれるアジサイ。すべては、ありのままの姿でしかなく、すべてを受け入れる。茶釜の沸き立つ湯の音を聞きながら、心は茶室の外の世界全体に滲み出し、溶けていく。自己が外へ滲み出せば、外は、まるでウソのようになる。なぜなら、自己なんてあってないようなもの。そうすると、すべてはないものになる。

つまり、このウソっぽい感覚の原因を多角的に検討すると、そもそもすべては刹那的なものであって、なくなるものだからであり、考えすぎにより刺激の感知がにぶっているからであり、実のところ、未来の枠組みの中にいるからであり、すでに自然と一体化する術を会得してしまったからであるといえる。

そんな状況や感覚をもってしまった自分は、すべてがウソだという思いにとらわれ続けるに違いない。ウソなんだから、あっても、なくても同じ。もう少し時間がたてば、この状況というものが失われてしまう。あの人も、この人も、みんないなくなってしまう。この日々築きあげてきた生活スタイルもなにもかも、消えてなくなるんだ。すごく寂しい。

そんな消える世界に、なにを築き上げていけばいいんだって思うけど、築いていかないと、僕らはいきていけない。いろいろなものを作って、人の役になって、感動を与えて、循環させる。一步、一步足跡をつけて、日々確実に歩んでゆく。その感覚がなければ生きていくことは困難だ

。こんなことを考えるとロクなことはないし、楽しくない。世の中少し楽しくするために、分裂することにした。

すなわち、自分にはなにもないことを理解しているナデシコと、  
考え事ばかりして、感覚が鈍っている雲男と、  
未来の枠組みにすでにいる未来人Bと、  
自然と一体化して、解脱の域に達している茶人Eと、  
ただのデクノボーのローリーだ。

僕は、5分裂することに成功した。そして、最近、でてきそうで、自分の中で、ウケているのが、

誇大妄想家商社マンのサトシと、  
浮ついた三流金融マンのマックスフリーである。

彼らは、すぐにではないが、もうすぐ、出てくる。出てきそうなかんじだけど、正体不明で、僕にとって、現段階では、説明不能なので、あえて、先走った説明はしないことにしておく。ただ、いずれ絶対に出てくる。

ナデシコは、僕の凍った心臓に、ガラスのめげもんを打ち込んだ。冷えた心臓は、表面に白い霜がおり、冷気が周辺を漂う。硬く凍り付いた心臓に、ガラスの破片が、突き刺さっている。けど、血は出ない。冷たくて血が凍ってしまったのか、それとも、ガラスのめげもんによって、血が噴出するのを防いでいるのか、その両方なのか、よくわからないが、血が出ることはない。かれこれ、そのような状態が何年も続いている。にわかに、その異物が気になるが、気が付かないように過ごすけれども、ときどき、思い立ったように気が付いてしまう。

ナデシコが打ち込んだめげもん。いつも突き刺さっているけれども、まあ、気にしないでおこう。そのうち、めげもんが、心臓に同化するかもしれない。

そう思いながら、嫌いなブロッコリーにマヨネーズをたっぷりつけて食べていた。

実は、今は、あたたかいご飯に、うにをのせて食べたい気分であることは、半分わかっていたのだが、今、目の前にあるブロッコリーを口の中に入れていた。

正直に、本当は、ご飯が食べたかった。あたたかいご飯に、のりをつけて食べる。トロがいい。いや、生ガキを食べたい衝動に駆られていた。けど、ブロッコリーを食べている。人生そんなもんだろう。

逆にそのような状態のほうが、落ち着くというか、慣れ親しんでいるというか、そのほうが、しっくりくる。

心の臓にはめげもんがうちこまれていて、口にはブロッコリー。

なんか、すごくしっくりくる。逆にこれがフツウな感じだ。よかった。いや、よかった。

雲男はのんびりしたいのに、未来人Bはほってはおかなかった。未来人Bは、雲男の未来像をまたたくまに描き、実行計画書まで作って、雲男を説き伏せようとしていた。

「そんなに、ぼーっと考えごとばかりしていて、何になるんだ。ビジョンを描いて実行に移したらどうなんだ。そんなぶらぶらしている暇があるんだったら、君のあるべき姿に近づくように行動したらどうなんだ」

「いや、そんな気分じゃない」

「君は空回りしているんだよ」

「けど、君の描いたビジョンに興味ないんだ」

「君を生かしてくれている社会に貢献できる喜びというものを感じたことはないのかね」

「ああ、でも、そういうこともやってみたい気がする」

「そんな覚悟じゃだめだ。君はそれでいいの？」

「別に、僕は雲なんだから、ふわふわと浮いていればいいの」

「なんだ、それ。まともな人間がいうことではないな」

「だから、雲なんだって」

まあ、いいやとって、雲男ビジョンという冊子を置いていってしまった。雲男はその冊子をぺらぺらとめくってさっと一読すると、こんなのウソだ、とって、冊子を投げ捨てた。

雲男はミルクが飲みたくなり、キッチンにある冷蔵庫の中から牛乳パックを取り出して、コップに入れて飲んだ。冷蔵庫の中の冷気が心地よかった。牛乳は食道から胃へと流れ込んだ。

雲男は、まだ、ここにいることを感じた。

「僕は流れ流れて、別のところへ行く」

そんなことを直感していた。

「のんびりやればいいじゃない。なんも、せかせか、せかせかと、やる必要ないんじゃないの？」

未来人て奴はうぜーな。僕は、ここにいたいんだから、いいじゃんか。ここで、いろいろなことを考えごととして、いろいろなことが知ればいい」

だけど、自分には手足がないように感じた。気が付くと、ナデシコがそばにいた。

雲男が、クーラーをがんにきかせて、ソファで寝ころび、うたたねをしていると、つけっぱなしのテレビから「茶人Eが殺害された」というニュースが、おぼろげながら聞こえた。夢の中にいた雲男が現実世界に引き戻されるのに数十秒ほどかかった。

その茶人Eに、雲男は親しくしてもらっていた。マイホームの中に4.5畳の京間の茶室を作りこみ、その道を究めることに心血を注いでいた。その茶人Eが殺された。共鳴して、めげもんが、さらに心臓にぐいぐいと突き刺さった。痛かったが耐えていた。茶人Eは、通常、夏場には好んで茶を点てないが、その弟子と2人そろって倒れている姿が発見された。警察によると背中から刃物で刺された形跡があり、部屋一面に流血していた。江戸時代に書かれた掛け軸に血痕がついている。不思議なのは、事件発生から発見されるまで、夏の暑い盛りの中、丸一日、放置

されていたことである。

全体を織りなす、ひとつの要素が消えると、バランスが非常に悪くなり、その維持さえも難しくなる。茶人Eの消滅によって、生まれた者がいた。誇大妄想家の商社マンのサトシであった。やばい、これは、やばい。きっと、未来人Bとタッグを組んで、僕に挑んでくるに違いない。その前に、茶人Eを殺害した犯人を捜さなければならぬ。なぜ、消滅しなければならなかったのかを知って、この世界のバランスを取り戻さなくてはならない。

雲男はえらく沈んでいた。存在がないことによって存在があることをいやというほど、思い知らされていた。転落の淵から奈落へ無限に投げ込まれるような気がしていた。茶人Eと自分とは、精神的に深いつながりがあるんだとあって、その消滅をあきらめきれずにいた。自分が雲男になれたのも、茶人Eのおかげだと。だから、雲男は茶人Eを殺害した奴に復讐をしようと思いついた。雲男が疑いを抱いたのは、未来人Bであった。

未来人Bは、変化、変化といって騒ぎまわる。その独りよがりの暴力性に嫌気がさしていた。まさに、そうすることでしか、生き延びられないかのように、まるめこもうとしているところが、気に障る。未来人Bは、いつも雲男の邪魔をする。もって、否なるもの。水と油の関係。犬猿の仲。目障りなもの。雲男ビジョンを蹴飛ばしてやった。

未来人Bは、雲男ビジョンだけでなく、ナデシコ・ビジョン、ローリー・ビジョン、サトシ・ビジョンを作成し、ひとりひとりに配ってまわっていた。まるで、自分が、この者たちのマネージャーであるような顔をして、実は、支配者的なことをしているのである。

しかし、雲男は、雲男ビジョンを蹴ったものの、内容が気になり読み返してみた。

『雲男のよさを生かして、将来的には、人々を癒やすことを職業とするべきで、そのためには4段階のステップを踏んで、戦略的にコトをなすべし』

なに？ なかなか面白いことが書いてあるなあ。奴も僕のことをわかっているみたいだ。なんだか、そういう方向もよいかもしれない。雲男は雲男ビジョンに少し興味を持ち始めた。

ぱらぱらとめくるとこう書いてあった。

『今の雲男は、最終形であり、そのことをみんなに知ってもらって、そのような場に落ち着けば、ビジョンは達成される』

雲男は、うれしくなってきた。すでに僕は最終形なんだ。無理をして、なにかをしなさいといけ

ない訳ではない。このままの自分でいいんだ。

そうとらえた。ただ、そのあとに、こう付け加えられていた。

『その場へ行く方法を自分で考えなさい』

でたよ。でた。雲男は、また、読む気をなくし、雲男ビジョンを投げ捨てた。

身軽な雲男は一瞬、身が重たくなったような気がした。しかし、なにか気になる。

未来人Bの話は、なにか麻薬のようにかんじた。奴に呪文をかけられると、何かになれると、そんな思いにさせられてしまう。この人格は、未来人Bにコントロールされているのか。絶えず、未来人Bは、ビジョンを量産し、それにうまくのせられた分裂分子が、成長し、やがては、その人格に大きく影響していゆく。ならば、茶人Eは、どのみち、未来人Bに殺害されることは間違いない。ナデシコか、ローリーか、サトシがやったとしても、未来人Bが関与していることは明白だ。なぜなら、奴は全員にビジョンを配っている。そこに種子を植え付け、行動を起こさせる。

未来人Bは、雲男をうっとおしく思っており、雲男を生んだ茶人Eを憎んでいるはずだ。雲男はそう思っていた。雲男は、おせっかいの未来人Bが、嫌でしょうがなかったので、当然、相手も、自分のことをそう思って疑わなかった。そして、大事な友人である茶人Eを殺害した。雲男にはお見通しであった。

雲男にも、いろいろ言い分はあると思うが、最終的には、茶人Eがいなくなったあと、誇大妄想家の商社マン・サトシに、すべての人格が統合されたいった。原初的な雲男の発生により、人格が分裂し、未来人Bの働きがあつて、茶人Eが消滅され、雲男の力も減衰していった。そして、全体としてバランスを取り戻し、サトシとして統合された。

商社マンサトシは、パリ行きの飛行機に乗り、ロシア上空を飛んでいた。

了

雲男

<http://p.booklog.jp/book/74598>

著者：池田真哉

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/ikeshin55/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/74598>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/74598>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ